

福島親子の新しい日常への道程（1）

——子どもの生活時間と心身の健康との関連を中心に——

○愛知県立大学 牛島佳代

中京大学 成 元哲

中京大学 松谷 満

桃山学院大学 阪口祐介

1 目的

われわれ福島子ども健康プロジェクトでは、福島県中通り 9 市町村の 2008 年度出生児とその母親を対象に、2013 年 1 月から 1 年おきに 5 回の調査を実施した。本報告は、親が子どもと一緒に過ごす時間が変化したことが子どもの心身の健康に与える影響を分析する。毎年、子どもの外遊びの時間が増える一方、小学校 1 年から 2 年になるにつれ、「ほぼ毎日、お子さんと遊ぶ機会」が激減している。小 2 になり、おけいこや習い事、子どもだけでの遊びなど、子どものライフスタイルが変化している。こうした子どもの生活時間の変化が子どもの適応と精神的健康（SDQ）と心身の健康にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

2 方法

福島県中通り 9 市町村の 2008 年度出生時の親子に対し、2013 年 1 月以降、5 回にわたって実施したパネル調査のうち、全てに回答した約 900 人を比較分析する。本報告では、子どもの生活時間の変化が子どもの適応と精神的健康（SDQ）と心身の健康にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

3 結果

（1）小学校 1 年から 2 年になるにつれ、親子が過ごす時間は減っている。その代わりに、同輩で過ごす時間が増えた。（2）子どもの適応と精神的健康（SDQ）は外在化問題行動の「行為」の面において支援の必要性が高い。特に、その傾向は男子において顕著である。（3）子どもの健康は良好な状態が続いている。身体症状はほとんどの項目で減少、あるいは横ばい傾向にあるが、「頭痛」が年々増加している。また、「皮膚のかゆみ」が一貫して高い水準である。

4 結論

第 1 に、子どもの成長に伴い、子どもの生活時間は大きく変化している。子どもの生活時間の変化が子どもの心身の健康に影響を及ぼしている。第 2 に、これまでのわれわれ¹⁾や諸外国²⁾の研究では、子どもの「行為」面での問題行動は、原発事故後の母親の生活変化と関連があることが明らかになった。特に、母親の放射能への対処をめぐる周囲との認識のずれ、経済的負担感、うつの三つの要因であった。第 3 に、しかし、子どもの親離れが進んでいるので、子どもの外在化問題行動や健康状態は母親の精神的健康を含む生活変化以外の要因によるものであると考えられる。その要因に関する慎重な検討が求められる。子どもの生活時間の変化と外在化問題行動の支援ニーズとの関連について、当日、より精緻な分析結果に基づいた報告を行いたい。

引用文献

1) 成元哲、牛島佳代、松谷満、阪口祐介. (2015). 終わらない被災の時間, 石風社, 277

2) Lowe, S. R., Godoy, L., Rhodes, J. E. & Carter, A. S. (2013). Predicting mothers' reports of children's mental health three years after Hurricane Katrina. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 34(1), 17-27.